

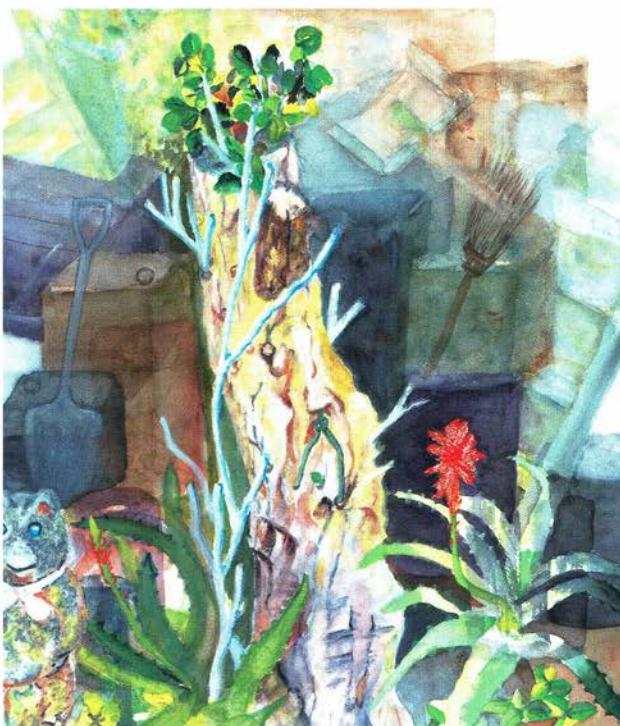
二〇二一年(令和三年)七月一日發行(毎月一回・日發行)

香蘭

第九十八卷第七号

村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)7月号

第98卷

第7号

通卷1087号



香蘭

2021年(令和3年)7月号
第98卷 第7号 通巻1087号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (71) 高田 みちゑ 表二

二 推薦香蘭集 一

香蘭集 三

作品一特選 (五月号)

相川・飯島・石井・工藤・鈴木 (桂) ······

16

作品二・三特選 (五月号) 青山 (侑) ······

高畠・坪・長野・横山 ······

16

村野次郎への旅 (135) 武藤・小笠・田中 (あ) ······

手島・能城・渡邊 (典) ······

40

一頁公論 (2) 「京都・鴨川デルタ」 森田 (徹) ······

桑原祐子 ······

39

エッセイ・自由研究 「長物車のこと」 森田 (徹) ······

市川義和 ······

33

七首抄 (五月号) 葛原妙子 ······

田中あさひ ······

25

私の読む現代短歌 (8) 「現代の魔女」 丸山三枝子 ······

松田恭子 ······

2

焦点 (五月号) 「食べ物と暮し」 有馬智賀子 ······

篠永路子 ······

18

作品一評 (五月号) 「作品一」 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

44

作品二評 (五月号) 「作品二」 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

45

作品三評 (五月号) 「作品三」 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

46

文法あれこれ (26) 白井絹子 ······

田中美智子 ······

47

緑地帶 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

48

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

49

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

50

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

51

編集後記・新宿日記 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

52

表紙絵 中村陽子 「おしゃべりな木」 目次・緑地帶カット 和田和雄 ······

田中美智子 ······

53

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

54

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

55

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

56

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

57

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

58

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

59

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

60

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

61

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

62

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

63

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

64

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

65

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

66

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

67

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

68

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

69

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

70

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

71

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

72

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

73

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

74

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

75

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

76

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

77

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

78

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

79

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

80

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

81

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

82

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

83

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

84

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

85

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

86

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

87

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

88

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

89

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

90

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

91

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

92

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

93

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

94

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

95

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

96

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

97

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

98

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

99

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

100

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

101

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

102

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

103

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

104

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

105

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

106

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

107

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

108

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

109

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

110

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

111

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

112

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

113

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

114

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

115

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

116

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

117

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

118

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

119

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

120

歌集管見 渡辺良歌集『スマーケブル』評 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

121

歌会及び会合・会員消息・他 渡辺礼比子 ······

田中美智子 ······

高田みちゑ

村野次郎作品 私の愛誦歌（71）

私の本棚には文庫版『櫛風集』と新書版『村野次郎三百首』しかありませんが、一番取り出しそうい場所を占めています。

そして折折に村野先生の歌の世界を訪ねます。その時に道標となるのは、巻末記、解説などです。大変に優れていて頼り甲斐があります。それでも、八五〇首余りから一首を選ぶとは、どうしたらよいか迷いました。

先生の歌はいつもゆるぎなく手堅いとの印象を持ちますが、一方繊細で美しい自然詠も多く、悲しい程、心に染みてくる歌もあります。

けれど敢えてこの歌を選んだのは村野先生がこれを詠まれた歳（昭和四十八年、七十九歳）が私と重なつて共感を覚えたこと、下句の表現が何と素晴らしい含蓄のある内容を簡潔に歌われていることか、と思つたからです。
お忙しい日常の中で、自らの老いを見つめた時、いつたい先生は心にどんな風景を見ておられたのでしょうか。

『角筈』

四選者 の 作品

徒勞に近き

平塚

千々和 久幸

薔薇の花ばかりを数え帰り来ぬ徒勞に近きひと日なりしよ
白秋の「全都覺醒賦」口遊び朝早き新宿の交叉路渡る
後ろ向きに左手を挙げ消え行きぬ古き映画のシーンのような
ホチキスの針に噴き出でし積年の錆が資料の肩まで及ぶ
こうしてはいられない理由が解らないだからこうしてはいられないのだ
梅雨に入る前には傘を買わんなど思いつつぬるき湯船に浸かる
夕焼けのチャイムが一時間先に延び海べりの街春になりたる

病棟の妻の消息絶えしまま連休の逝くコロナは知らず
令和のさくら

鎌倉 香山 静子

五分咲きも満開もありて桜咲く道を歩める足はかるしも
人に遭ひ人と別れる今生を思ひて仰ぐ令和の桜
父兄の逝き兄も逝きたり今生の桜を仰ぐ年を重ねて
桜にも寿命のあるを思ひつつ散りくる道を歩みゆくなり
時々は落ちくるはなびら拾ひつ桜咲く道ゆるりとあゆむ
華やかに咲きゐし桜もはらはらと風なき夕べの足元に散る

ことごとく花散り果つる晩春よわれの命も刻まるること
葉ざくらとなりたる道をゆける時ひとときは胸にひびく鐘の音
八〇二〇ならば楽勝、二十七年前と同じ歯を繕われいる
桜前線北上しつつ見も知らぬ死者を増やして春は逝くなり
春は逝く

我孫子 丸山 三枝子

今日が過ぎ明日がまたきて今日が去り葉桜となる良き知らせ來よ
飛鳥山の梅檀の上ゆうゆうと鳶旋回す 夏がくるから
かわるがわる来る蝶や虫あそばせて藤の花房そよぐともせず
心してくれと我に大鳥居せまりくるなり近づくほどに
歳月に風化して立つ朱の鳥居 風化してゆく感情もある

花の構図

東京 桜井京子

なにもかも攫ひゆくべし春一番しののめの窓を叩いてやまず
くすのきの落葉に桜の花びらが紛れてゆけり風に吹かれて
いつか見た鳩だねおまへは裏庭にわたしはゐないたぶん明日も
うつろなる心埋めむ川べりの空木の花なり盛りを過ぎて
冬が過ぎ春も行くなりベランダにローズマリーが黙つて咲いて
鶴の木に等とちりとり掛けてある昼の公園がらんと閑か
森の奥の電話ボックスの傍らに射干の花しんと咲いてゐたりき
ゆりの木が坊主にされてしまつたとはるみさん歌ふその下をゆく

作品一特選

(五月号作品から)

千々和 久幸 選

習志野 石井 雅子



尾根道の無人売場に求めたる雑の節句の花桃の束
ひしひしと苔となる花桃をかかえくなり子を抱くように入会者のこの名この顔に覚えあるかつて我が会退きたる人々・飯島奥を抑えござつぱりした出来映え、作者には不満?

ひとりぼっち

〈クリぼっち〉ひとりぼっちのクリスマスたくさんメールくるけどぼっち
カレンダーの誕生日につい〇つけるもう歳を取らないあなただけれど
軒下にてろんてろんと揺れてゐる紐はわたしだ 飛ぶ気のあらず
明治の代に六海里照らして灯台は大神宮の丘に鎮まる
「くる」「こない」花占ひの甘美さよ確率論の外にコスモス
エレベーター降りて冷たい通路にて抱き合つてゐる冬の恋人
柿バナナにんじんリング店先に色の溢れる八百屋は元気
・ひとりぼっちの淋しさを軽妙な風景に変え、平常心を演出。

夢に訪い来よ

東京工藤 溪子

この虚しさ誰にか告げん起きいで昨日と同じ所作に始まる
過ぎし号の「香蘭」繰ればわたくしの冴えざる歌の七首が並ぶ
しみじみと文学性なきわれかなと友の歌読む 嫉妬にも似て
かつて歌会ひらきし部屋に夜々眠る夢に訪い来よあの人あのまま
七人の侍在りし支部歌会逝きし人あり去りし人あり
「女性なれど短く発言する」と言う 大いに受けたり委員会の席
・今や「香蘭」の至宝的存在、文学より大事なものを見る一人。

勿忘草

川越 相川 公子

春一番が吹くかも知れぬといふ予報ききつつ植ゑる勿忘草を
生八ツ橋と抹茶みやげに友の来てわたしの気分はけふ春隣
うす紅の侘助椿がもうすぐに終つてしまふ君はやく来よ
豪雪を気づかふメールしてをりぬそこはかとなくひと恋しくて
失望と希望が日毎入れかはる物忘れする夫との日々は
またひとり心寄せゐし女の逝く凜と明るき遺影のこして

岩槻の亡き師の庭によみがへる庭石の辺に貝母芽吹けば

・周辺の人への思いを淡く柔らかな哀感に包んで歌い留めた。

玉縄ざくら

川崎 飯島 智恵子

予報士の「四月の陽気」に背を押され夫の走らす車に乗りぬ
裏門に入る近道たどりゆく玉縄ざくらは今や五分咲き
あのベンチと言えば通じるあのベンチに並び仰げり真っ青な空
見通しの障りになると伐られたる銀杏の根方にひこばえの出づ

人

生 西 宮 鈴 木 桂 子

歩みゆく音なき朝に音を聞き風なき夕べに風を聞きつつ
その花の名を知りたるはずとあとうすきみどりに咲ける春蘭
放心の夜のひととき窓近く月の光にしばらく打たる

摘みて來し日本水仙、生きるには何が大事か子に問はれをり
生前にたつた一枚絵の売れし、ゴツホの生きた〈人生〉これも
仕事終へ自分にもどる。水にはふ小道をかへる自分とは誰
・奔放さが雅へそして思弁的な詠み口に変わったが、これが本筋。

一日早く

鎌 倉 高 畠 憲 子

一月の二十七日梅咲けば実朝斃れし雪の日おもふ

「世の中は常にもがもな」と詠みにける実朝しのぶコロナ禍の今
ひとしきり鶴が揺すりし藪椿の幹しづかなり子の熱下がる

紅梅の咲くは言はずに水仙の咲かざるを言ふ家居の夫は

まずココアを啜りたくなる二月来る白秋啄木好みしここア

暦上の調整なれどわが生日の二月三日が立春となる

・手堅く詠むことは卒業 時には野心作にも挑戦したい。

歩きつづける

東 京 坪 裕

冬を咲く蝋梅の黄の冴ゆるなり決して派手な花ではないが
夕焼けを産み落としたる日輪はぐつすり休むか明日のために
君の言うことは決して赦せぬと心を閉じて眠りにつきぬ
寒いのは君だけない北半球全部がさむい我慢しなさい

窓ぎわが最もぬくい場所だから妻と我とで取り合っている

この寒さ靴の底より浸みてきて暗き舗道を歩きつづける

・常套を脱した特異な自の面白さ、二、四首目は作者の独壇場。

崖の水仙

横 浜 長 野 道 子

二時間をかけて作りし胡桃入り恵方巻なり夫触れもせず

一人鍋二つ作りて突きあうこともなくなり立春近し

薬局に夫の薬をとりにいきわれの病に話終始す

腰骨にホカラソ張りて出勤の夫は意識して背筋を伸ばす

新しき銀のリングをつけし夫イニシャルの名はわれにはあらず

はちみつの最後の一滴は蜜蜂の涙のようで今日は使わず

・夫を詠えば俄然輝きが増す、ストーリー・テラーである。

庭の木蓮

宇都宮 横 山 慎 夫

老いの歌詠む年並になり果てぬ庭の木蓮笑つてゐるが

離れ住むひとりの食事に気を遣いあれこれ思う酒飲みながら

オリンピック森さんの様な人がいて森さんのような発言をする

鶏殺傷のニュースに続き白鳥の飛来のニュース我が家テレビは
コロナの事歌に詠むのはもうやめた周り一面コロナだらけで
ゆつくりと読書三昧の夢は何処山のようなる本に挫ける
エアコンとストーブ炬燼と万全の寒さ対策も眠気には勝てず
・老来、秀歌を詠もうなどという邪念がなく、益々閑達自在。

作品一、三特選



(五月号作品から) 桜井京子選

〈作品二〉

春萌す

米子青山侑市

吹雪止み大山の空にかすかなる陽の差しきれば目を細め見る
稀まれに隈なく晴るる日和かな休耕田に芹摘みに行かん
給付金十万円にて新調のメガネなりしがなぜかさびしも
毎日が休日なるに心急くは先行き短き身にこそあらめ
・穏やかな日常をかすかな哀感を滲ませて歌い、共感を誘う。

地価上昇す

柏江口絹代

ゴンドラを吊り下げる拭く窓ガラス ビルのあわいに陽が沈む頃
侘助の花がしんしん咲いている小熊医院に人影見えず
おばあさん達がゆるりと歩きいる柏の街の地価上昇す

春いまだ浅きひと日にメルボルンからコロナ終らずとメールが届く
幸せってこういうことね豆腐屋のラツバが聞こえる春の午後です
・三首目の展開の意外性、五首目は郷愁をそそる懐かしさがある。

私 の 薬

鎌倉 高田 みちゑ

エクモすら教ふ術なく死にゆくを日々数量としてメディアの伝ふ
人類の狼狽ぶりを天空の穴より見下ろす神も仏も
カレンダー去年のやうにかけ替へて花を活ければ新年は来る
隣より役員交替手紙入る「コロナですからお会ひしません」
トライデント・アルファカルシドル・タリージェと音楽の符号のやうだ私の薬
・コロナに明けコロナに暮れる日々の中、五首目の遊び心が楽しい。

天空谷の大杉

大分中島紘子

来し方に出会いし人らを現にも夢にも想う冬深む日に

屋久島の天空谷に人知れず数千年を大杉は立つ
「あなたとも別れの時がくるんだね」午後のおやつの蜜柑が言えり
わが庭に赤いしつぽの竜が住む腐葉土の中プランターの下
また一つ逝く楽しみをみつけたり世界一周風になる日よ
・誰にでも一度は訪れる死を樂観的に受けとめ歌境を深めている。

如月尽

藤沢牧田明子

極寒の海のふかきよ鱈場蟹のふくらむ脚を食みてしまへり
一つ歳かさねるやうに足もつる横断歩道の疾風のなか
来るはずの春待ちあるも頼りなく誰が捨てしかマスクの一つ

夫を家に残して聞きかる『方丈記』資料はA3三枚づり
「ゆく川の流れ」の無情は今の子に負担大きと時代の酔ゆる
・一首目、事実の向こう側の漂渺とした詩的な世界を凝視している。

子と犬と

さいたま 松沢 みどり

自らの尻尾を咬みつづける犬を止めようもなく途方にくれる水も飲まぬおやつも食べぬ飼犬の気持ちがわかる手立てはあらずどうすべきか考えてみるとどうしようなんて迷つても落ちこむばかりに「ごともなかつたように朝は来ていつもどおりに子は登校す・子と犬に振りまわされて奮闘する作者」四首目で平然に戻っている。

絹の音色

西東京 武藤昭彦

ビイオロンの絹の音色の流れ来る川井郁子のゴンドラの唄「夏は来ぬ」は心の花の大会歌 わが「香蘭」は「夜来香」かとなり家のBMWが埃あび不要不急の外出はせず

〈作品三〉

女性初

鎌倉 小笠 岐美子

「女性初」それを喜ぶ女はなし 「男性初」は嬉しいですか
登用は女だからかと問う我に「君は違う」それも常套句

男並みに仕事が出来るとほめられて笑みを浮かべたあの時私は「女性初」と言われしボスト後任は男性となり十年経たり・ジエンダーを自身に引き付け、社会的課題に向き合つた意欲を買う。

小梅の花

取手 田中 あさひ

たれかいふ鳥は神さまのお遣ひ〉とこの朝しきりになく四十雀

二年ほどいのちのうちの一時をわれの窓べに寄る四十雀 分を知ることの大切(いぬふぐり)道ばたに瑠璃のはな咲かせつつ 小梅の花は梅の花よりちひさくて小梅だけを生むために咲く・事柄の背後に思索的な意志がはたらき、禁欲的な気分がある。

木瓜

福岡 手島洋一

本日は予定通りに事進み湯上りに飲む一杯の水 道の辺にぼつと紅見せる木瓜冷えし心に明かりを灯す ほた山は草木の生える地となりて立坑櫓に風吹き渡る 検診を明日に控える雪の朝体重計の電池を換える

年代物

東京能城春美

背負うつてなんだか苦手荷うならたまに踏ん張る感じが良いか どうやらぶりも散歩欠かさぬ人の引くりードの先の子犬のきもち ひらがなでやさしさとあり羞しさと注釈みつけ雲の切れゆく・自在で軽やかな詠み口ながら悪戯心がのぞく。

紅葉の嵩

鎌倉 渡邊典子

マスクして何を匿さむ浅春の直なる光に身をさらしつつ ゆくりなく額に触れたるあたたかさけふ立春の朝の斜光ぞ 枯葉積む菟生に声なき声ありて牡丹は赤き冬芽を持てり われのみの知る音ならむ老い夫がしづかに酔漬けの蕪を噛み見る 手慣れた詠み口に安定感があり、思索的な影らみに魅力がある。

村野次郎への旅（135）

「香蘭」創刊号を読む（二）

千々和 久 幸

「香蘭」創刊号（大正十二年三月）には村野次郎先生の「冬日爐邊」十二首が掲載されている。この欄には作品の上下の区分はなく、先生の作品は社友十一人中の最後に収められている。

冬日爐邊 村野 次郎
①冬さりて隣の家の見えるまで 小庭さびしく
落葉しにけり
②水ぎはの木櫛にさす冬の日の夕さり來りう
すれつつ見ゆ
③籠居の障子にうつる冬の日もあなあわただ
し今日も暮るゝを
④裏庭の櫻大木を吹きたわめそれたる風は雨
戸をゆする
⑤をさなごを爐邊にねむらせうら安し外には
つる木枯の音
⑥うつし世に生れて間もなき吾子ゆゑ耳さや

り居り不思議がりつつ
⑦子を守りて爐ばたにひと日こもれども悔ゆ
るこころのわれに起らず
⑧戸をゆりて凧ゆけり爐のふちに身ぬちぬく
みてねむる安けさ
⑨槽柵の火の臉をとほす居爐裏べにはやもね
むたくなりにけるかも
⑩とろとろと槽柵の火燃ゆる居爐裏べに兒を
抱きてしばしうつなかりし
霜
⑪霜の夜にひとりしねむる板戸には笹のさや
らう音聞ゆなり
⑫かなしかる人を思へばつゆ霜の曉はやく消
ゆるはかなさ

は一変した。加えていま一つ、生涯に亘る短歌の拠点となる「香蘭」を自ら發意して刊行し、生活者としても歌人としてもその晴れがましいスタート地点に立たされていた。言わば一般人の誰もが一度は通過する、青春期から壮年期への節目に当たっていた。

だが先生の作歌姿勢に格別の気負いや昂ぶりはなく、いつに変わらぬ淡々たるマイ・ペースぶりが窺える。先生にとって短歌は、疲れたこころを癒やす「オアシス」という位置づけであり、創刊主宰者としての理念や宣言は掲げられていない。青、壮年期特有の客氣や野望、それ以上の文学的な野心は無用のものだつた。そんな気負いや思い入れは、先生にとつては恐らく「過剰なるもの」であつた。このあたりが先生の大人たる所以である。わたくし流儀に言えば老成願望ということになる。

「冬日爐邊」一連も淡淡たるベースに違はず、見るべきはしっかりと見、詠るべきは丁寧に詠むという感じで詠われている。総じてこの期の先生の作品は、デッサン期にあることを思わせる。デッサンの大事さは、師である北原白秋を鏡にしたものであろう。

図式的に言つて了えは、この一連のデッサンを主体とした叙事歌と、内心の心躍りを表

白した抒情歌の二つの流れを読者はどう読むか、が試されているような気がする。

後者により心惹かれるわたしの読み方の偏向（だろう）も、そこに由来する。

この一連で心情表白にわずかな心躍りが窺えるのは、⑤⑥⑦⑩である。いずれも長子を得た父親の表情を捉えたものである。ここに歌われている「をさなご」は、現「香蘭」発行人である中村富美子氏であることも付け加えておこう。

このうちで⑥は『次郎三百首』にも採られているもので、「香蘭」人にはよく知られている。下句に若い父親の率直な気持が「不思議がりつつ」と捉えられているところが、いかにも新米の父親（？）らしく微笑ましい。

⑤⑦は子守の歌だが、「爐邊」に当時の間取りが窺える。さしずめ今日のリビングというところだろうか。作者は子守をしながら木枯らしの音を聞き、過ぎた一日の悔いを思い返しているという構図である。

そして⑧～⑩は、爐邊でのふかふかした時間に安らいで作歌し、思索（詩作）に飽けばついとろとろと居眠りをするといった長閑で、至福の時間が詠わっている。

①～④はわたしの言うデッサンの歌、つまり

り叙景歌である。①では落葉する小庭を、②は冬日のさす木棚を、③では障子を通して冬

の一日の慌しさが柔らかく、丁寧に写し取られている。それも作者の視野に向こうから冬の光景が飛び込んでくるというのではなく、作者が向こうの景色を懸命に引き寄せているという歌いぶりである。

⑪⑫は一連とは離れたところで作者の内面にある孤独感、寂寥感が詠われている。共に具体を出さないで雰囲気だけを提示する、という詠い方は初期からのものである。

⑪では眠りに落ちる前に板戸に障る笹の音を聞いている、と言うだけである。しかしさらにそれが冷えの伝わってくる「霜の夜」で

あり、「ひとり寝」である（妻は入院中で不在と読んだが）ことが付加されている。作者の

心中や思うべし、という歌である。

⑫は「かなしかる人」を⑪の入院中の妻と読めば、ドラマ性が出てくる。こうなると結局は「はかなさ」まで言わないと、若い作者は自分の気持を率直に表現したことにはならないのだろう。

ところで前回に「香蘭」創刊号の「六號雄記」（雑記か）で、会員から解説不能の文字が

あるとのご指摘を受けたので一言しておきた

い。原文は次の通りであった。

…苦しみ多き人間の行路に於て心備きたるもののはこのオアシスで其心を醫すがよい、（以下略）

「心備きたるもの」は明らかに誤植で、正しくは「心憊れきたるもの」でなければならぬ。読み方及び表記は「心つかれきたるもの」である。実はわたしも読めなかつた字だが、このたび『次郎のことば』の『香蘭』後記より「再読して確認出来た。

一般に「憊」の字は「疲勞困憊」（何をする氣力も無いほど疲れきること）。新明解国語辞典で知られているが、「困憊」は「疲れはてること。苦しみ疲れること」。

ついでに「行路」はここでは「人として生きていく道。世わたり」（広辞苑）即ち「人生行路」を意味している。さらに、「醫す」は病気をなおすことだが、動詞ならば「醫す」、名詞ならば、「くすし」（医者）を意味する。いずれにしろ新かな世代の識字能力の低さを痛感させられたことであつた。